

# アーナンダガルバ著 *Vajrajvālodayā*

## — 内容概観および「ヨーガのみによる成就法の手引き」 説示箇所 の梵文テキストと註 —<sup>1</sup>

伊集院栞

### 1 はじめに

『ヴァジュラジュヴァーローダヤー』(*Vajrajvālodayā*) は、『サマーヨーガ』(*Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālaśaṃvara*) に基づく成就法儀軌である。ヨーガタントラの学匠アーナンダガルバ(8–9 世紀頃か<sup>2</sup>)の著作で、蔵訳は伝えられておらず、ラーフラ・サーンクリトヤーヤナがゴル寺で撮影した梵文写本 1 本(16 フォリオ)のみが伝えられている。SANDERSON 2009 にこの写本の部分的な校訂と抄訳が示されたが、全体の校訂は発表されていない<sup>3</sup>。

本稿は当該作品の冒頭 2 フォリオ分、「ヨーガのみによる成就法の手引き」(*yogamātrasāadhanopayikā*) 説示箇所について、暫定的なテキストを示し、彼の説く成就法の構造を理解するための一材料を提供することを目的とする。

<sup>1</sup> *Vajrajvālodayā* の写本のデジタルデータを利用するにあたり、Harunaga ISAACSON 先生にご協力を賜った。また Péter-Dániel SZÁNTÓ 博士に『サマーヨーガ』の刊行前の校訂本を参照させていただいた。記して謝意を表する。本論文で扱う箇所については、2018 年 2 月の筑波大学でのリーディング、および 2020 年夏にオンラインで行った研究会にて精読する機会を得、その際多くの貴重なご意見を頂いた。Harunaga ISAACSON 先生、苔米地等流先生、種村隆元先生、倉西憲一先生、加納和雄先生、Junglan BANG 博士に感謝を申し上げる次第である。無論、本論文のいかなる誤りも筆者が責任を負うものである。

<sup>2</sup> アーナンダガルバの活動年代は確定していない。高橋 1999, 268–278, WEINBERGER 2003, 86–88 が 9–10 世紀頃、ISAACSON and SFERRA 2019, 235–236 が 9 世紀後半–10 世紀前半と推定する一方、SZÁNTÓ and GRIFFITHS 2015, 368 は 8 世紀後半–9 世紀前半と推測する。Jñānapāda (fl. c. 770–820, cf. SZÁNTÓ 2019) の直弟子である Vitapāda/Vaidyapāda の \**Samantabhadra-ṭīkā* に “kun dga’ snying po’i zhal snga nas” (D1872, 142a5) との表現があり、これが当該のアーナンダガルバを指しているのであれば、下限を 9 世紀に定めることができるか。

<sup>3</sup> 筆者は博士論文に向けて *Vajrajvālodayā* 全体の校訂テキストと訳注を準備している。なお、サールナートの Central Institute of Higher Tibetan Studies の機関誌 *Dhīḥ* 60 号に *Vajrajvālodayā* 冒頭の転写テキストが掲載されている (p. 19)。

## 2 *Vajrajvālodayā* の内容概観

まずは *Vajrajvālodayā* 全体の内容を概観しておきたい。個々の儀礼の役割や儀礼間の繋がりに不明な点が残るため、暫定的なものにはなるが、シノプシスを示すと以下の通りである。

- |                             |                              |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1. 帰敬偈                      | 14. 須弥山と楼閣の観想                |
| 2. 行者の資格と修習に適した場所           | 15. 境界を結ぶこと・地を縛ること<br>による守護  |
| 3. 手・舌の加持                   | 16. ヘルカマンダラの観想               |
| 4. 金剛輪印によるマンダラの生起           | 17. 百八名讃                     |
| 5. 四方礼, 三宝帰依, 発菩提心          | 18. マンダラの縛                   |
| 6. 全ての印を結ぶ際に共通の儀礼           | 19. マンダラの閉門                  |
| 7. ヨーガ<br>(アヌヨーガ開始)         | 20. ヘルカ族 21 尊の三昧耶印           |
| 8. ヘルカの智薩埵の引き入れ             | 21. ヘルカ族 21 尊の法印             |
| 9. ヘルカの尊容                   | 22. ヘルカ族 21 尊の羯磨印            |
| 10. 金剛集会印による如来の身体への<br>引き入れ | 23. ヘルカ族 21 尊の大印             |
| 11. 金剛界マンダラの五仏の四印           | 24. 印を結ぶときの共通の規定             |
| 12. 心臓・眉間・喉・頭頂の加持           | 25. 諸供養                      |
| 13. 自加持 (自灌頂)               | 26. 敬礼                       |
| 13.1 髻鬘・仏宝髻・冠灌頂             | 27. サルヴァヨーガ                  |
| 13.2 金剛鬘灌頂                  | 28. アティヨーガ                   |
| 13.3 被甲                     | 29. 七女尊の成就法                  |
| 13.4 金剛主灌頂                  | 30. 大成就法                     |
| 13.5 金剛名灌頂                  | 31. ヨーガによる成就法                |
| 13.6 悉地金剛禁戒                 | 32. 印が緩んだ場合・観想を終えた<br>い場合の儀礼 |
| 13.7 三三昧耶授与<br>(アヌヨーガ終わり?)  | 33. 結び                       |

冒頭偈で自らを「成就法の手引き」(sāadhanopayikā) と称することから分かるように、本作品は『サマーヨーガ』ヘールカ族マンダラの観想の次第を説くものであり、マンダラの造壇や灌頂儀礼は説かない<sup>4</sup>。前半部（特に 3. ～ 12., 13.4 ～ 13.6）は主に『真実摂経』(Sarvatathāgatatattvasaṃgraha) を依用し、『サルヴァヴァジュロードヤー』(Sarvavajrodayā) や『降三世マンダラ儀軌』(\*Trailokyavijayodayā)<sup>5</sup> などアーナンダガルバの他の儀軌書と共通する素材が散見され、次第の上でも類似する<sup>6</sup>。一方、後半部（特に 15., 16., 18. ～ 23., 25. ～ 32.）は『サマーヨーガ』からの引用を多く含み、アーナンダガルバが同タントラをどのように理解していたかが窺える。以下では、前半部と後半部に分けて、内容を順に見ていきたい。

### 前半部（1. 帰敬偈～ 13. 自加持（自灌頂））

まず、1. 帰敬偈のあと、2. 行者の資格と修習に適した場所の規定がある。すなわち誓戒 (samaya, 三昧耶) と灌頂を得た人で、誓戒の遵守により心が清まった人がこの成就法を行うべきであること<sup>7</sup>、尸林、祠、女神の社などを行の場とすべきことが述べられる。

そこで行者はまず、鑄造仏や磚仏からなるマンダラを正面に置き<sup>8</sup>、マントラを唱える舌と印を結ぶ手を加持する（3. 手・舌の加持）。次に、金剛輪印でヘールカマンダラを生起させ（4. 金剛輪印によるマンダラの生起）、そ

<sup>4</sup> マンダラの観想・造壇・灌頂儀礼を説く *Sarvavajrodayā* は自らを *maṇḍalopayikā* と称している。なお、*upayikā* という語は *upāya* からの派生で、正規の形ではないが、仏教梵語として認めて良いと思われる (ISAACSON 2009, 112n39, cf. BHSD s.v. *upayika*, *upāyikā*)。

<sup>5</sup> 蔵訳のコロフォンによれば、この作品のタイトルは \**Trailokyavijayamaṇḍalopayika* であるが、帰敬偈 (D 67a4: *jig rten gsum rgyal 'byung ba yi || dkyil 'khor cho ga bshad par bya ||*) を見るに \**Trailokyavijayodayā* であった可能性が高い。アーナンダガルバの他の著作で、原語のタイトルが判明しているもの (*Sarvavajrodayā*, *Vajrajvālodayā*, *Vajrasattvodayā*) が *udayā* で終わることとも合致する。

<sup>6</sup> Ijuin 2018 の対照表を参照。

<sup>7</sup> 後注 (1) (2) を参照。

<sup>8</sup> インドネシアの中部ジャワに位置するスロチョロから『サマーヨーガ』金剛薩埵部のブロンズ像のセットが出土している (松長 1996)。

れを花などで供養してから、四方への礼拝、三宝帰依、発菩提心を行う (5. 四方礼、三宝帰依、発菩提心)。

次に、虚心合掌・金剛合掌・金剛縛を続けて結ぶ。結んだ金剛縛を裂いて/解いてから (sphoṭayet), 金剛遍入の三昧耶印で心臓に忿怒金剛杵を憑依させ、百字真言で堅固にし、金剛拳の三昧耶印を結ぶ。この一連の儀礼は『真実摂経』§299–300 に典拠がある (6. 全ての印を結ぶ際に共通の儀礼)<sup>9</sup>。

次に、7. ヨーガが説かれる。行者はまず、先に心臓に憑依させた忿怒金剛杵の中央にフーン字を置き、それが本質的に清らかであり、そのフーン字こそが一切法無我性であると観想する。次いで、(1) 自身の心を 16 母音の転じた月輪の形に、(2) その上にフーン字と子音の転じた第二月輪を、(3) その上に忿怒金剛杵を観想する。(4) 忿怒金剛杵が自身であるという自意識 (ahaṃkāra) を観想し、金剛杵から金剛部族を生み出し、再び金剛杵に戻してから、(5) 薩埵加持のヨーガ (sattvādhiṣṭhānayoga)<sup>10</sup> によって自身が金剛薩埵であると観想し、「私は金剛薩埵である」と唱える。(1)～(5) の観想は、ちょうど五相成身観のそれぞれの段階に配当しうる。

続いて、行者は (6) 金剛薩埵としての自意識を保ちつつ、自身をヘールカとして観想し、「私は大三昧耶薩埵である」と唱える。(7) ヘールカの三昧耶印を結びつつ、「私は誓戒である」と唱える。(8) 「三昧耶薩埵よ、私を加持せよ」と唱えつつ四処加持をして、(9) ヘールカの大印を結ぶ。この一連の観想は『真実摂経』§301–303 に典拠がある<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> 『真実摂経』では「あらゆる印に共通の〔印〕縛の廣大儀軌」(sarvamudrāṇām sāmānyo bandhavidhivistaro) と呼称される。經典本文に金剛縛を結ぶときに虚心合掌と金剛合掌を経ることと、最後に金剛拳印を結ぶことは説かれていないが、アーナンダガルバの注釈『真実光作』(\**Tattvāloka*kārī, D2510 li, 164b7ff.) には規定されている。金剛拳の印を結ぶ理由として、アーナンダガルバは經典の以下の文言を挙げる。STTS §259 14): sarvamudrāprasiddhas tu vajramuṣṭinibandhanāt || 「金剛拳を結ぶことであらゆる印が成就する」。なお、*Sarvavajrodāyā* の対応箇所には続いて罪障の摧破が説かれ、『真実光作』でもそのように指示される。

<sup>10</sup> 後注 (11) を参照。

<sup>11</sup> 『真実光作』の該当箇所の注釈には、上記の観想を行うのは「金剛薩埵などの読誦者」(rdorje sems dpa' la sogs pa'i zlos pa po, D li, 165b4) であり、如来の読誦者 (de bzhin gshegs pa'i

上記の内容は、後述する五種瑜伽中のヨーガの内容と合致し、実際 *Vajrajvālodayā* でも「ヨーガのみによる成就法の手引き」と称されている。

本稿所収の梵文テキストの内容は以上である。

8. ヘールカの智薩埵の引き入れから 13. 自加持までの儀礼は、おそらく アヌヨーガと呼ばれる一連の観想を説いている<sup>12</sup>。

行者はまず『真実摂経』§254–256「大印成就法広大儀軌」(*mahāmudrā-sādhanaavidhivistara*) を典拠とする 8. ヘールカの智薩埵の引き入れを行う。その次第は *Sarvavajrodayā* の §39 (及び 40–47) に合致する<sup>13</sup>。その際、観想の対象である 9. ヘールカの尊容が詳説される。10. 金剛集会印による如来の身体への引き入れ<sup>14</sup>で智薩埵を身体に引き入れたら、11. 金剛界マンダラの五仏の四印<sup>15</sup>、12. 心臓・眉間・喉・頭頂の加持、13. 自加持（自灌頂）<sup>16</sup>により、この智薩埵との合一を堅固にする。

以上が前半部の内容である。

---

zlos pa po) は「心の洞察 (*cittaprativedham*) などの五現等覚次第を修習するべきである」(*D li*, 1654b3–4)「*om cittaprativedham karomi* から *yathā sarvatathāgatās tathā 'ham* までのみを読むのであり、*saṃayasattvo 'ham* ではない」(*D li*, 166a5–6) と述べられる。「如来の読誦者」は如来の瑜伽者 (*de bzhin gshegs pa'i rnal 'byor pa*, *D li*, 166a5) と換言されており、どの尊格をメインに観想するかに応じて、ヨーガを行う際に上述の内容を行ずるか、五相成身観を行ずるかが定められているものと思われる。*Sarvavajrodayā* §51 も参照。

<sup>12</sup> 8. の冒頭に「もしアヌヨーガを行いたいと望むならば」(*saced anuyogaṃ kartukāmo bhavati*) とあるため、以降がアヌヨーガであることは明らかである。一方、アヌヨーガがどこまでを指すのかは明示されていない。ここで 13. をアヌヨーガの終わりとした根拠は二つある。一つ目は『降三世マンダラ儀軌』のマンダラ観想法の次第である。この儀軌はマンダラを観想する際に、〈マハーヨーガを行う場合〉と〈行わない場合〉という二通りの次第を規定する (*Ijuin* 2018, n. 8)。このうち〈マハーヨーガを行わない場合〉の次第が、本作品の 8. ～ 13. の次第に合致する (*ibid.*, 1128–1129 の表を参照)。二つ目は『真実光作』の記述である。後述するように、次節の【用例 4】で説かれるアヌヨーガの次第は、本作品の 8. ～ 13. の次第によく一致する。

<sup>13</sup> 詳細は稿を改めて論じたい。

<sup>14</sup> 『真実摂経』§256 に典拠がある。

<sup>15</sup> 『真実摂経』§255–256 1), 264 (三昧耶印), 278 (法印), 251 1), 285–286 (羯磨印, 大印) にも転用) に典拠がある。

<sup>16</sup> 13.1 ～ 13.3 は『サマーヨーガ』に、13.4 ～ 13.6 は『真実摂経』に、13.7 は『理趣広経』に典拠がある。

後半部 (14. 須弥山と楼閣の観想～ 33. 結び)

14. 須弥山と楼閣の観想: *Sarvavajrodāyā* §60–61 に対応する.

15. 境界を結ぶこと・地を縛ることによる守護: 自身を金剛薩埵として観想し, 金剛薩埵になったつもりで金剛杵を抽擲する.

16. ヘルカマンダラの観想: マントラを唱え, ヘルカ族 21 尊をマンダラに入れる. ここでヘルカを除く 20 の女尊たちの尊容とマンダラ中の位置が詳説される<sup>17</sup>.

17. 百八名讃: お越しいただいた尊格たちを『理趣広経』所説の百八名讃<sup>18</sup>で賛嘆する.

18. マンダラの縛: 鉤索鎖鈴のマントラと印により, マンダラに尊格を引き寄せ, 入れ, 縛り, 自在にし, 成就する.

19. マンダラの閉門: 金剛夜叉印で妨害者を追放してから, マンダラに柵と網をかけ, 金剛拳印で閉門し, 金剛護印で守護する.

20. ヘルカ族 21 尊の三昧耶印～ 23. ヘルカ族 21 尊の大印: 『サマールヨーガ』を典拠とするヘルカ族 21 尊の四印を結ぶ.

24. 印を結ぶときの共通の規定: 上記の印を結ぶ際の決まり事であり, 『真実摂経』§578, 2189 が引用される.

25. 諸供養: 華・焼香・灯・塗香の供養や欲触愛慢の秘密供養, 楽器の供養などが説かれる. 『サマールヨーガ』『理趣広経』が主な典拠となる.

26. 敬礼: 四礼をなし, 『サマールヨーガ』所説の偈頌を唱える. 次のサルヴァヨーガ, アティヨーガ, 七女尊の成就法も『サマールヨーガ』を典拠とする.

27. サルヴァヨーガ: 動不動の一切存在を本質とする一切瑜伽者 (*sarvayoga*, =ヘルカ) を観想し, 一体化することを説く.

28. アティヨーガ: 女尊たちとの結合 (*saṃyoga*) により大持金剛の樂を獲得することを説く.

29. 七女尊の成就法: ガウリー, チャウリー, プラモハー, ヴェーター

<sup>17</sup> この箇所は SANDERSON 2009, 149ff. に原文が引用され, 抄訳がなされている.

<sup>18</sup> PĀ ch. 26, D488 205b4–206a6. 平岡 2007 参照.

リー、ブッカシー、チャンダーリー、ガスマリーの成就法と、それに対抗するムドラー (pratimudrā) を説く。

30. 大成就法：ひと月の間親近を行い、描かせたパタの前でさらにひと月読誦をしたのち、満月日の一夜読誦をすれば、ヘールカとして成就することを説く。

31. ヨーガによる成就法：マンダラがあたかも眼前にあるかの如くに見えるようになるまで、マンダラとのヨーガを行う。その後満月日に一夜読誦をすれば、ヘールカとして成就することを説く。

32. 印が緩んだ場合・観想を終えたい場合の儀礼：印が緩んだ際に百字真言を唱えること、観想を終える際の発遣の次第を説く。

最後に 33. 結びの偈頌を述べて終わる。

### 3 アーナンダガルバの説く五種のヨーガ

伊集院ほか 2020 でも触れたが、『サマーヨーガ』2・3 章には、ヨーガ・アヌヨーガ・サルヴァヨーガ・マハーヨーガ・アティヨーガという五種のヨーガが登場する<sup>19</sup>。この五種のヨーガに関して、アーナンダガルバの『理趣広経注』(\**Paramādyā-tīkā*) に次のような記述がある。

【用例 1】PĀ-tīkā D hi, 222a7–b3:<sup>20,21</sup>

<sup>19</sup> 伊集院ほか 2020, 53–57 参照。

<sup>20</sup> ad PĀ ch. 26 D 488, 205b7–206a1 (百八名讃) : thog mtha' med cing thog mtha' can || mdangs ldan dang por thams cad gnas || snying po phyag rgya sbyor dam tshig | de nyid bden pa mchog pa ste || 「始まりと終わりがなく、始まりと終わりを有する方よ、輝きを有する方よ、始めに一切に住する方よ、心真言よ、印よ、ヨーガよ、警戒よ、真実 (tattva) よ、諦 (satya) よ、最上なる方よ。」

<sup>21</sup> 原文 : rnal 'byor zhes bya ba ni rnal 'byor dang rjes su rnal 'byor dang | thams cad kyi rnal 'byor dang | shin tu rnal 'byor gyi dbye bas rnam pa bzhi'o || de la de kho na nyid rnam pa lnga bsgoms pas bdag nyid rang lha'i ngo bo nyid du bskyed pa bsgom pa ni rnal 'byor zhes bya'o || ye shes sems dpa' bcug nas de dang lhan cig tu gyur par lhag par mos pa ni rjes su rnal 'byor zhes bya'o || rgyu ba dang mi rgyu ba thams cad kyi ngo bo nyid kyi rang bzhin du bdag nyid bsgom pa ni thams cad kyi rnal 'byor zhes bya'o || rnal 'byor dang rjes su rnal 'byor dang

「ヨーガ」とは、ヨーガとアヌヨーガとサルヴァヨーガとアティヨーガの区別により四種類である。そのうち、(1) 五相の真実の観想によって、自己を、自身の尊格を本質とする者として生起させる観想が、ヨーガと言われる。(2) 智薩埵 (*jñānasattva*) を引き入れてから、それと一体化すると確信することが、アヌヨーガと言われる。(3) 動不動のもの全ての性質を本質とするものとして自己を観想することが、サルヴァヨーガと言われる。(4) ヨーガとアヌヨーガとサルヴァヨーガを観想することによって、心が一点に集中すること (*cittaikāgratā*)、それがアティヨーガと言われる。

【用例 2】 *PĀ-tīkā D i*, 89a5–90a2:<sup>22,23</sup>

(1) 自身の本尊 (*adhidaivata*) の想起 (*anusmaraṇa*) に励むことがヨーガである。自身の本尊の想起を対象とする心を生じる人がヨーギンであるという意味である。… (中略) …以上のように、輪廻を本質とするものへの対治であるヨーガを説いてから、(2) 今度は、智薩埵を引き入れてから、一体化したと確信することによって、あたかも錬金術 (*rasāyana*, *gser 'gyur rtsi*) を行い銅などの鉱物を銀などにするかのように、完成することを示すために、アヌヨーガが説かれたことと、(3) 動不動の一切の事物を本質と

thams cad kyi rnal 'byor rnam par bsgoms pas sems rtse gcig tu gyur pa gang yin pa de ni **shin tu rnal 'byor** zhes bya'o ||

<sup>22</sup> ad PĀ ch. 36, D 488, 241a1–3 (「最上秘密一切瑜伽儀軌」冒頭部)、『理趣広経』の原文と和訳、および『理趣広経注』の抄訳については、伊集院ほか 2020, 54–55 を参照。

<sup>23</sup> 原文：rang gi lhag pa'i lha rjes su dran pa'i brtson pa ni **rnal 'byor** yin no || rang gi lhag pa'i lha rjes su dran pa'i yul can gyi sems bskyed pa ni rnal 'byor pa yin no zhes bya ba'i don to || ... de ltar 'khor ba'i bdag nyid kyi gnyen por gyur pa'i **rnal 'byor** bstan nas da ni ye shes sems dpa' bcug nas gcig tu gyur pa lhag par mos pas gser 'gyur rtsi blangs nas zangs ma la sogs pa'i khams dngul la sogs par byed pa bzhin du rdzogs par 'gyur ba yin no zhes bya ba rab tu bstan par bya ba'i phyir **rjes su rnal 'byor** gsungs pa dang | brtan pa dang g-yo ba'i dngos po thams cad kyi rang bzhin gyi gzugs kyi rang gi lha'i bsgom pas kyang shes rab dang thabs kyi ye shes thams cad du thogs pa med par 'gyur ro zhes bya ba rab tu bstan par bya ba'i phyir **thams cad kyi rnal 'byor** dang **rnal 'byor chen po** gsungs pa dang | shin tu chags pa'i bsgom pas kyang rnal 'byor dang rjes su rnal 'byor dang thams cad rnal 'byor dang | rnal 'byor chen po shin tu rdzogs par 'gyur ba nyid yin no zhes bya ba'i phyir **shin tu rnal 'byor** yang gsungs pa yin pa ni | *slar yang gzhan* zhes bya ba la ...



するお姿をもつ本尊の観想によっても、智慧と方便の智があまねく無碍になると示すために、サルヴァヨーガとマハーヨーガが説かれたことと、(4) 非常に貪欲 (atirāga) の修習によっても、ヨーガ、アヌヨーガ、サルヴァヨーガ、マハーヨーガが究極的に (ati-) 完成することをまさに述べるために、アティヨーガも説かれたと言う [以上全ての] ことについて、「さらにまた別の」と言われた [ そのうち ] …

この二つの用例では、五種のヨーガそれぞれの特徴が述べられている。伊集院ほか 2020 と重なる部分があるが、再度上記の内容をまとめると、すなわちヨーガとは本尊の観想であり、具体的には「五相の真実の観想」(五現等覺次第のことか) により、自身を本尊として観想することを指す。

アヌヨーガは本尊の智薩埵を身体に引き入れ合一することであり、ヨーガとの違いは智薩埵の観想の有無にある。

アティヨーガは貪欲行に関わる観想による心の集中であり、他のヨーガの究極的な完成に資する。これはまた、女尊とのヨーガとも関係する<sup>24</sup>。

サルヴァヨーガは一切存在を本質とする本尊の観想である<sup>25</sup>。

マハーヨーガの特徴はここでは述べられず、サルヴァヨーガと並記されるのみである。おそらくヨーガやアヌヨーガよりも高度なマンダラの観想を指すと思われるが<sup>26</sup>、アーナンダガルバの作品中、マハーヨーガ (mahāyoga, rnal 'byor chen po) という語の用例は非常に多く、網羅的な調査が必要であ

<sup>24</sup> 伊集院ほか 2020, 56 参照。Cf. *Vajrajāloḍayā* §28, fols. 183v6–7: athātiyogaṃ sādhyatukāmo bhavati | tataḥ sarvadevīsaṃyogaṃ sarvagataṃ vibhāvya mahāvajradharasukhatanmayatām gataḥ śrīherukam ātmānaṃ gītenānena codayet |.

<sup>25</sup> Cf. *Vajrajāloḍayā* §27, fols. 183r6–7: karaṇavāraṇaharaṇacumbanādīsarvayogasukhāsvāda-sarvayogamudrājñānanyuktaṃ sthīracālasarvabhāvasvabhāvaṃ sarvayogaṃ ātmānaṃ niścītya, この箇所の sarvayoga は主尊ヘルカを指す。

<sup>26</sup> 注 12 で述べたように『降三世マンダラ儀軌』の観想法には〈マハーヨーガを行う場合〉と〈行わない場合〉の二通りの次第が規定されており、この儀軌を見る限り、両次第の大きな違いはマンダラ諸尊全てを観想するか、中尊のみを観想するかにあるようである (伊集院 2015, 433)。ただし下記【用例 4】ではアヌヨーガにおいても複数の尊格を観想するよう規定されている。また、マハーヨーガがマンダラ造壇時の必須事項として説かれている例がある。TĀK D li, 151b3–152b5: de ltar rang gi slob ma rnam kyis rnal 'byor dang | rjes su rnal 'byor bshad nas

るため、今は結論を保留しておく。

この五種のヨーガのうち、ヨーガとアヌヨーガは基礎的な観想であり、サルヴァヨーガ、マハーヨーガ、アティヨーガはより上位の観想として位置付けられている<sup>27</sup>。

### ヨーガ、アヌヨーガ

前節で説明したように、*Vajrajvālodayā* の前半部にはヨーガとアヌヨーガが説かれている。この二種のヨーガの理解を助けるため、アーナンダガルバの注釈書の中からヨーガとアヌヨーガに関する記述を取り出して見てみたい。この二語の用例は多くあり、本来はそれら一つ一つを網羅的に調査すべきであるが、今回は簡易的にそれぞれ 1 例だけを取り上げる。かつ【用例 4】は『真実摂経』§254–256 の注釈箇所でかなり長い記述であるので、翻訳を載せず、大まかな観想の次第のみを抽出する。

#### 【用例 3】PĀ-ṭikā D i, 89a6–b5:

印を掲げること (?) を終わりにもつ儀軌を行ってから、その後 [1] 虚空に等しい月輪の姿があり、[2] その上に二番目の月輪がある。[3] さらにその

---

slob dpon rnam kyis dkyil 'khor bsgrub pa dang | rang gi lha bsgrub pa'i rnal 'byor chen po'i cho ga brjod par bya ste | ... rigs rigs su nges pa kho nar dkyil 'khor bri ba na | rang gi 'khor los sgyur ba'i sbyor ba byas la | rnal 'byor chen po dang ldan pas bya'i | gzhan du na dkyil 'khor 'grub par mi 'gyur te | bcom ldan 'das kyis de bas 'bad pa thams cad kyis || rnal 'byor chen po brtsam par bya || zhes gsungs pa yin no || 「以上のように自身の弟子たちによるヨーガとアヌヨーガを説いてから、阿闍梨たちによるマンダラと本尊を成就するマハーヨーガの儀軌が説かれるべきである。… (中略) …部族ごとの規定として、マンダラを描く際は、自身の輪 (=マンダラ?) により変ずるヨーガ (?) を行い、マハーヨーガを備えた者が行うのであって、さもなくばマンダラが成就しなくなる。世尊は『それゆえ、あらゆる点で努めてマハーヨーガを行いなさい』(≈ *Vajrasīkharatantra* D480, 182b3) とお説きになっている。」

<sup>27</sup> 伊集院ほか 2020, 57 で既に触れた用例ではあるが、本文と和訳を示しておく。PĀ-ṭikā D i, 99a5–7: rnal 'byor ram rjes su rnal 'byor ram kun gyi thun mong thams cad rnal 'byor dang | rnal 'byor chen po dang shin tu rnal 'byor ni shin tu gsang ba las kyang mchog yin pas na de'i phyir so so'i skye bo la bstan par mi bya'o || 「ヨーガあるいはアヌヨーガは全てに共通する [一方]、サルヴァヨーガとマハーヨーガとアティヨーガは、最高の秘密のなかでも最勝であるので、そのため凡夫には示してはならない。」

同じ二番目の月輪において、自身の尊格の心真言を伴った五鉤金剛杵なるものがある、その場所において [本尊を生起するの] である。他の [尊格] については、金剛杵から生じた [尊格] 自身の三昧耶印 (cihna のことか) がある。

[4] 次に、印の自意識 (ahaṃkāra) を観想し、[5] 薩埵加持のヨーガ (sattvādhiṣṭhānayoga) によって、自身を金剛薩埵として観想してから、[6] 偉大な誓戒の存在 (mahāsamayasattva) としての自我を、金剛薩埵の瑜伽者は観想すべきである… (中略) …次に「私は偉大な誓戒の存在である」 (mahāsamayasattvo 'ham) と唱える。… (中略) …

[7] 次に金剛薩埵などの瑜伽者は皆、それぞれの尊格の三昧耶印を結び、「私は誓戒である」 (samayo 'ham) という共通の心真言を唱え、自身の尊格の身語心金剛を本質とする自我を起こしなさい。[8] 次に「誓戒の存在よ、私を加持せよ」 (samayasattva adhiṣṭhasva mām) という [マントラ] と共に、自身の尊格の三昧耶印によって、胸・眉間・喉・頭頂に自加持をしてから、[9] 大印を結び、諸々の身語心金剛によって、自身の尊格の本質を持つものとして自身を修習する。以上がここでの、智薩埵の引き入れを欠いた、自身の尊格の観想を本質とするヨーガである。<sup>28</sup>

【用例 4】TĀK D li, 148b6–151b3:

「さてこの」 (tatrāyam, STTS §254) 云々によって、全ての儀軌の成就と成就のための行為を解説する。「大印成就法の廣大儀軌」 (mahāmudrāsādhana-vidhivastara) について、「大印の成就法」とは智薩埵との一体化を確信することである。そのための「廣大儀軌」とは、金剛合掌 (cf. 6. 全ての印を結ぶ際に共通の儀礼) から始めて「汝は誓戒である。私は誓戒である」 (samayas tvam samayo 'ham, cf. STTS §254: samayas tvam aham) と唱えるまでである… (以下次第のみ抽出)

1. 金剛合掌と金剛縛を結び、憑依 (āveśa) を行う (cf. 6. 全ての印を結ぶ

<sup>28</sup> 長文であるため、原文は省略する。

際に共通の儀礼)。

2. 法無自性のヨーガから薩埵加持のヨーガ (sattvādhiṣṭhānayoga) まですを行い、三昧耶印と大薩埵を觀想し、加持して、大印を結ぶ (cf. 7. ヨーガ)。
3. 金剛薩埵の大印を成就する (cf. 8. ヘールカの智薩埵の引き入れ)。
4. 同じ手順で、金剛王～金剛遍入までの大印を成就する。
5. 金剛集会の印を結び、一切仏を身体に入れる (cf. 10. 金剛集会印による如来の身体への引き入れ)。
6. 如来についても大印を成就し、身体に入れる。
7. 全ての尊格の三昧耶印と法印・羯磨印・大印を結び、加持と灌頂を行う (cf. 11. 金剛界マンダラの五仏の四印 (?), 12. 心臓・眉間・喉・頭頂の加持, 13. 自加持)。

…以上がアヌヨーガである。<sup>29</sup>

【用例 3】の内容は *Vajrajvālodayā* の 7. ヨーガと合致する。はじめに規定される「印を掲げること (?) を終わりにもつ儀軌」(phyag rgya bteḡ pa'i mthar thug pa'i cho ga) はおそらく *Vajrajvālodayā* の 6. 全ての印を結ぶ際に共通の儀礼で説かれる内容を指すと解釈した<sup>30</sup>。またヨーガを「智薩埵の引き入れを欠いた本尊の觀想」と述べる点は重要である。

【用例 4】の 3～7 までの次第は、*Vajrajvālodayā* の 8. ヘールカの智薩埵の引き入れ～13. 自加持までに概ね対応する。2 でアヌヨーガを行う前にヨーガを行うことを説くが、同様の規定が *Vajrajvālodayā* にもある<sup>31</sup>。

以上、不完全な調査ではあるが、五種のヨーガの内容とヨーガとアヌヨーガの次第について確認した。今回調査できなかった内容については、今後の課題としたい。

<sup>29</sup> 長文であるため、原文は省略する。和訳についても別の機会に改めて提示したい。

<sup>30</sup> この点是要調査である。

<sup>31</sup> *Vajrajvālodayā* §8, fol. 172r7–v1: saced anuyogaṃ kartukāmo bhavati, yathoktam anantarok-tayogaṃ kṛtvā ....

## 4 *Vajrajvālodayā* 校訂テキスト

### 写本について

- ゲッティンゲン大学図書館所蔵 Xc 14/39, 170r6–186r5 (BANDURSKI 1994, 75–77). 文字の形から 14 世紀頃ネパールで筆写されたと推測されている (ISAACSON 2009, 92; n7). ISAACSON 2009 によれば, 当該の写本はヘーヴアジュラタントラ系の成就法文献のコレクションであり, 『サマーヨーガ』のヘールカ族に関する本作品は偶然 (おそらく誤って) 紛れ込んだものと考えられている (*ibid.*, 95).
- fols. 172v1–2, 173r4–v4, 176r7–v1, 176v5–6, 177r4–178r5, 178r5–v2 については, SANDERSON 2009, 149ff. において, 校訂と抄訳と共に引用されている. また ISAACSON 2009, 112 に, 作品の冒頭と末尾 (170r6–7, 186r3–5) の箇所在校訂が示されている. 両論文で示された読みについては, 著者名をあげる形で校勘欄に記した.

### 凡例

- ▷ (1) r の後の子音の二重化 (rmma < rma) や短化した二重子音 (tva < ttva), (2) 鼻音 (ñ, ñ, ñ, n, m) と anusvāra の交代, (3) 歯擦音 (s, ś, ṣ) の無区別な使用といった写本の書写上の特徴, および (4) 連声の不統一については, 意味に違いが生じうる場合を除いて注記せずに標準化する.
- ▷ virāma と avagraha はしばしば脱落するため, 注記せずに補填する.
- ▷ ダンダ (|) の位置は注記せずに文脈に応じて変更する.
- ▷ 真言は small capital で表記する. また見やすさのために真言の部分は連声を適用せず, 切り離れた形で示している (e.g., svĀHĀ iti, KAROMI iti). 煩を避けるため, これらの修正は校勘欄に掲載しない.
- ▷ conjecture や emendation を支持する文献がある場合は矢印で示した.
- ▷ 校勘欄は四層に分かれている. 第 1 層は引用文献およびパラレルの情報を書き, 第 2 層は特に密接に関連する文献の対応箇所の所在を示す.

つまり (1) アーナンダガルバによるマンダラ儀軌 *Sarvavajrodayā*, (2) *Sarvavajrodayā* からの影響が認められる<sup>32</sup>クラダッタ著『所作集成注』(*Kriyāsaṃgrahapañjikā*) 本尊瑜伽章, (3) 同じく *Sarvavajrodayā* との影響関係が指摘される<sup>33</sup>『悪趣清浄タントラ』(*Sarvadurgatipariśodhana*) のパラレルの情報を記す。また対応箇所を開始位置が分かるよう、テキストの右余白に a↓ などとして示した。第 3 層は写本の異読を記す。第 4 層はその他の写本の情報を記す。

- ▷ 本論文で提示する読みは暫定的なものであり、不明瞭な点を残している。特に読みに問題のある箇所については疑問符を付した。また、校訂に関する注記は後注で記し、梵文テキストの本文中で<sup>(1)</sup> などとして示した。

本論文で使用した記号・略号は以下の通り。

|       |                                   |
|-------|-----------------------------------|
| ac    | ante correctionem                 |
| add.  | added in                          |
| conj. | conjecture                        |
| D     | Derge edition                     |
| em.   | emendation                        |
| om.   | omitted in                        |
| MS    | <i>Vajrajvālodayā</i> Manuscript. |
| P     | Peking edition                    |
| pc    | post correctionem                 |
| Tib.  | Tibetan translation               |
| *     | <i>virāma</i> 記号                  |
| (...) | 不明瞭な文字あるいは文字の一部                   |

<sup>32</sup> 乾 1988, 114–115.

<sup>33</sup> 乾 1988, 113–114; 高橋 1990. この二書のほか、アーナンダガルバの師または弟子筋（兄弟弟子含む）の人物とも伝えられるスプーティパーリタの著作『ブータダーマラ尊成就法』も *Sarvavajrodayā* と類似した構成を持ち、多くの平行句・類似句を含むことが指摘されている（名取 2018）。ただし本稿に関係する箇所は校訂が刊行されていない。

## Preliminary Edition of *Vajrajvālodayā* (fols. 170r7–172r2)

### 1. Opening lines

namaḥ śrīhevajrāya ||

śrīherukaṃ namaskṛtya durdāntadamakaṃ vibhum |  
sādhana<sup>170r7</sup>payikāṃ vakṣye vajrajvālodayām imām ||

### 2. Required qualities of a practitioner and suitable places for practice

tatrāryasarvabuddhasamāyogatantravidhānena śrīherukamaṇḍale labdha-  
5 samayādiko<sup>(1)</sup> yogī<sup>170v1</sup> taduktasamayaparipālanaśuddhacitto<sup>(2)</sup> vicitravastra-  
saṃvītaḥ

śmaśānadevāyatanamātrsthānādisaṃsthitāḥ |  
vajraghaṇṭādhara nityaṃ sādha<sup>170v2</sup>yet siddhim uttamām ||

### 3. Empowerment of hands and tongue

sarvākaraṣamahāpūjāsādhana<sup>3</sup>ir niśiktaghaṭitādirūpaṃ<sup>(3)</sup> śrīherukamaṇḍalaṃ a.1  
10 purato 'vasthāpya sarvasattvahi<sup>170v3</sup>tahetoḥ śrīheruko bhaveyam iti cittam utpādyā

4–5 tatrārya...yogī || Cf. SVU §1, Tib. D 1b3–4: *de la 'phags pa de kho na nyid bsdus pa'i rgyud chen po'i cho gas dam tshig la sogs pa thob | rnal 'byor pa'i don du dkyil 'khor gyi cho ga bsdus bar bya'o* ||.

5–6 vicitravastrasamvītaḥ || SBSDJŚ 6.20c.

7 śmaśāna...saṃsthitāḥ || SBSDJŚ 7.5ab.

8 vajraghaṇṭādhara ... uttamām || PĀ ch. 33, D488, 225b7: *rtaḡ tu rdo rje dril 'chang zhiṅ || dngos grub mchog ni bsgrub par bya* ||.

9 sarvākaraṣamahāpūjāsādhana<sup>3</sup>ir || Cf. PĀ ch. 33, D488, 225b7: *thams cad dgug dang mchod pa che || bdaḡ byin rlaḡs sogs bsgrub rnaḡs so* ||.

<sup>a</sup> Cf. SVU §2–3, Tib. D 1b4–2a1; KSP Ed<sup>1</sup> §3–4; SDP 132,24–30.

4 tatrārya- || conj. (←MS186r4: *āryasarvabuddhasamā[yo]ga*); tatrācārya- MS 4 -sarva- || em.; -sava- MS 7 śmaśāna- || conj. (←SBSDJŚ<sup>S</sup>); śmaśāne MS SBSDJŚ<sup>Dh</sup> 7 -saṃsthitāḥ || conj. (←SBSDJŚ<sup>Dh.S</sup>); -saṃsthānataḥ MS 8 uttamām || em.; uttamam MS 9 -pūjāsādhana<sup>3</sup>ir || conj. (←PĀ: *mchod pa che*); -pūsādhana<sup>3</sup>ir MS<sup>pc</sup>; -pū | sādhana<sup>3</sup>ir MS<sup>ac</sup> 9 -maṇḍalaṃ || conj.; -maṇḍalakamaṇḍalaṃ MS

- hrīḥkāreṇa kaṇṭhadeśe 'ṣṭadalapadmaṃ jihvāpadmadale ca hūṃkāreṇa śuk-  
laṃ pañcasūcika vajraṃ niṣpādyā, VAJRAJHVĀ ity adhiṭṭhet |  
karadvaye Akārābhyāṃ candramaṇḍaladvayaṃ taylor upari hūṃkārabhyāṃ  
pañcasūcika vajradvayaṃ karaśākhāś caikasūcika vajrarūpā hūṃkāreṇaiva  
15 nirvartya, OM SARVAVIŚUDDHIDHARMATĀVAJRA SIDHYA HŪM iti vajrapadmāṃ  
baddhvā saptavārān parivartayet | evaṃ asuddho 'pi śuddhaḥ syāt |  
vajrabandhaṃ baddhvā tarjanīdvayaṃ samākuñcya parasparaprṣṭhasaṃsak-  
taṃ sūciyogenābhyantare praveśyāṅguṣṭhadvayaṃ saṃsaktaṃ sūcīm utthitāṃ  
kṛtvā paryāṅkasyopary uttānaṃ dhārayet | iyaṃ vajrapadmā ||<sup>(4)</sup>

#### 4. Emanation of the maṇḍala by means of the *vajracakramudrā*

- 20 OM VAJRACAKRA HŪM iti japan vajracakrāṃ baddhvālātacakravat  
pradakṣiṇabhramaṇayogena tayā śrīherukamaṇḍalaṃ nirmāya punas tām  
eva mukhe saṃsthāpya nirīkṣamāṇo 'ṣṭau vārān OM VAJRACAKRA HŪM iti  
japet | evaṃ śrīherukamaṇḍalapraviṣṭo bhavati |  
vajramuṣṭīdvayaṃ baddhvā dvyagryāntyavajrabandhanā |

15 OM SARVAVIŚUDDHI- ... HŪM || Not traced. = *Vasudhārādharmaṇi* Ed<sup>Dh</sup> 134,23–24; Ānanda-  
garbha's *\*Trailokyavijayodayā* D2519, 67b6.

17–19 vajrabandhaṃ ... vajrapadmā || Cf. PĀ ch. 33, D488, 235b4–5: *sor mo thams cad phan tshun sbyar || kun mchog rtshe mo dang bcas pa || mthe bo rdo rjes bkab pa ni || rdo rje padma zhes 'grub bo ||*; PĀ-*ṭikā* D i, 71b5.

20 OM VAJRACAKRA HŪM || STTS §1280, 1339; *\*Trailokavijayamahākalparāja* D482, 40b5.

20–21 -ālātacakravat ... || Cf. STTS §288: *alātacakrabhramitā vajradvayamukhotthitā* ||

24–25 vajramuṣṭīdvayaṃ ... -sādhikā || *\*Trailokavijayamahākalparāja* D482, 50b2–3: *rdo rje'i*

<sup>b</sup> Cf. SVU §17 Tib. D 3a3–5; KSP Ed<sup>I</sup> §26; SDP 138,1–8.

12 ity adhiṭṭhet || conj.; iti ṭiṣṭhet MS 13 -maṇḍala- || em.; -maṇḍalaṃ MS 13 taylor upari || em.; tayopari MS 14 -sūcika- || em.; -sūcikaṃ MS 14 karaśākhāś caika- || conj.; karaśākhāś caka- MS 15 nirvartya || conj.; nivartya MS 15 sidhya || conj.; siddhya MS 17 -dvayaṃ || em.; -dvaya MS 18 -dvayaṃ || em.; -dvaya MS 20 japan || em.; jāpam MS 21 pradakṣiṇa- || em.; pradakṣiṇā- MS 22 nirīkṣamāṇo || MS<sup>pc</sup>; nirīkṣamāna MS<sup>ac</sup> 24 dvyagryāntya- || conj.; dvyagryāntyā- SDP; dvyagryāntyā KSP; bodhyagrya- MS 24 -bandhanā || MS (←KSP); -bandhanāt SDP



## 5. Bowing before deities, taking refuge in the Three Jewels, and arising the mind to awakening

tataḥ sati saṃbhava puṣpādibhis tan maṇḍalaṃ saṃpūjya, OM SARVA-  
TATHĀGATAKĀYAVĀKCITTAVAJRAPRAṆĀMEṆA VAJRAVANDANĀM KAROMI ity  
udīrayan pañcamaṇḍalakena catasṛṣu dikṣu praṇamya,  
171r3

krpayā parītamānasam anaghamatiṃ sakalakāyahatamoham |  
30 sugataṃ prayāmi śaraṇaṃ sakalakulāmbhojamadhyagataṃ ||  
171r4  
pravaradhiyām ārāmaṃ hīnabhayaṃkaratayā ca jetṛvanam |  
dharmam gato 'smi śaraṇaṃ bhavavibhavavibhāvanācaturam ||  
rāgādyuragaviṣāpaham urukaruṇāmānasam vibuddhadhiyam |  
171r5  
vītabhavavanditam ahaṃ prayāmi śaraṇaṃ yatīśagaṇam ||<sup>(6)</sup>

35 triśaraṇam ādāyā(?)dyavajraṃ<sup>(7)</sup> baddhvā bodhicittam utpādayet — OM  
171r6  
SARVATATHĀGATAPARAMAMAHĀBODHICITTAM UTPĀDAYĀMY AŚEṢĀNAVAŚEṢA-

*khu tshur gnyis bcings te || mthe'u chung mdzud mo'i rdo rjes bcing || rdo rje 'khor lo zhes bshad  
de || dkyil 'khor thams cad sgrub pa'o ||. = SVU §17; KSP Ed<sup>I</sup> §26; SDP 138,4–5. KSP refers  
to this mudrā as vajrahetukarmamudrā. Cf. SVU §36(96): vajramuṣṭidvaye(read -dvayena) tar-  
janyaṅguṣṭhavaṃjra sarvamaṇḍalākaraṇāṃ vajracakrā nāma mudrā.*

26–27 OM SARVATATHĀGATA-... KAROMI || Not traced.

29–34 krpayā ... yatīśagaṇam || Āryā. = SVU §42(102) vv. (4)–(6); PĀ-ṭikā D hi, 303a6–b1.

35–39 OM SATVATATHĀGATA- ... -ADHIPATYĀYA || Not traced. ≈ PĀ-ṭikā D hi, 234b6–7. Cf.  
STTS §22: om bodhicittam utpādayāmi; §847: ...-āśeṣānavaśeṣasattvadhātuparitrāṇasarvavahita-  
sukhotamasiddhinimittam yāvat .... See also §210, 648 and so on.

<sup>c</sup> Cf. SVU §18, Tib. D 3a5–6; KSP Ed<sup>I</sup> §32; SDP 138,9–11.

28 catasṛṣu || conj.; catiṣu MS 29 parīta- || conj. (← SVU<sub>Tib</sub>: khyab pa'i); parīta- MS  
SVU 29 anagha- || MS; ānagha- SVU 31 ārāmaṃ || conj. (←SVU); āgāmaṃ MS 32  
bhavavibhavavibhāvanā- || conj. (cf. SVU<sub>Tib</sub>: srid pa'i 'byor ba zil gyis gnon pa'i mchog);  
bhavati bhavati bhāvanā- MS<sup>pc</sup>; bhavati bhāvanā- MS<sup>ac</sup>; bhayavibhavavibhāvanā- SVU 34  
vītabhava- || MS; vītabhavaṃ SVU 34 -vanditam || conj. (←SVU); -patitam MS 35  
triśaraṇam ādāyadyavajraṃ || conj., or, -ādyavajrāṃ?; triśaraṇam ādā(vo/bo/dho?)dyavajraṃ  
MS<sup>pc</sup>; triśaraṇam ādādyavajraṃ MS<sup>ac</sup>

SARVASATTVADHĀTUPARITRĀṆAHITASUKHOTTAMASIDDHINIMITTAM ATYANTA-  
BHAVASAṂSIDDHIMĀHEŚVARYĀDHIPATYĀYA YĀVAT SARVOTTAMAMAHĀSIDDHI-  
MĀHEŚVARYĀDHIPATYĀYA iti |<sup>171v7</sup>(8)

## 6. The practice common to the binding of all mudrās

- 40 tataḥ pratibimbādiprayogato<sup>(9)</sup> mudrābandhaṃ kuryāt | tatrāyaṃ mu-  
drābandho bhavati | sampuṭāñjaliṃ kurvann evaṃ vadet — ANYONYĀNUGATĀḤ  
SARVADHARMĀḤ iti |<sup>171v1</sup> parasparāṅgulibandhena vajrāñjalim — PARASPARĀNU-  
PRAVIṢṬĀḤ SARVADHARMĀḤ iti | vajrāñjaler atisubandhanād vajrabandham —  
ATYANTĀNUPRAVIṢṬĀḤ SARVADHARMĀḤ, VAJRABANDHA iti |<sup>171v2</sup>
- 45 tato vajrabandhaṃ hr̥di sphoṭayet — VAJRABANDHA TRAT̥ iti 3 | VAJRĀVEŚA  
iti vajrāveśasamayamudrāṃ baddhvā AḤkāram udīrayan pañcasūcikaṃ dīpta-  
jvālākulaprabhaṃ nīlajvālāmayaṃ vajrakulaparamāṇughāṭitaṃ tīkṣṇaṃ kro-  
dhavajram ākāśadeśāt svahr̥daye praveśya, TIṢṬHA VAJRA, DṚḌHO ME BHAVA,  
ŚĀŚVATO ME BHAVA, HR̥DAYE ME 'DHITIṢṬHA, SARVASIDDHIṂ ME PRAYACCHA,  
50 HŪṂ HA HA HA HA HOḤ iti tadāveśaṃ dṛḍhīkṛtya, VAJRAMUṢṬIḤ<sup>(10)</sup> iti vajra-  
<sup>171v3</sup>  
<sup>171v4</sup>  
<sup>171v5</sup>

41–44 ANYONYĀNUGATĀḤ ... || Not traced. Beside the parallel passages noted below, this set of three mantras appears in some ritual texts, e.g., SVU §50(110), *Guhyasamājamaṇḍalavidhi* 220, *Vajrāvalī* 12.1.3, and so on.

45 VAJRABANDHA TRAT̥ || STTS §299.

45–46 VAJRĀVEŚA ... AḤ || STTS §224: *vajrāveśa aḥ*, §300: *aḥ*.

48–50 TIṢṬHA VAJRA ... HOḤ || STTS §227.

50 VAJRAMUṢṬIḤ || STTS §136: *vajramuṣṭir vajramuṣṭir iti*. Cf. SVU §25, D 7a5: *badzra muṣṭi zhes bya ba*.

<sup>d</sup> Cf. SVU §24–25, Tib. D 7a2–5; KSP Ed<sup>1</sup> §55–58; SDP 148,1–7. See also STTS §299–301.

39 -ādhipatyāya iti || em.; -ādhipatyāceti MS 41 -bandho || em.; -bandhaṃ MS 41 evaṃ || conj.; eya MS 41 -ānugatāḥ || em.; -ānugatā MS 42–43 -ānupraviṣṭāḥ || em.; -ānupraviṣṭā MS 43 iti || em.; om. MS 43 vajrāñjaler || conj.; vajrāñjalir MS 43 atisubandhanād || conj.; atisubandhanā MS 46 -samaya- || em.; -smaya- MS<sup>pc</sup>; -ya- MS<sup>ac</sup> 47 -paramāṇughāṭitaṃ || conj.; -paramāṇughāṭita MS 47 tīkṣṇaṃ || conj.; tīkṣṇavajra- MS 49 me bhava || em. (←STTS); me bhava me va MS 50 hūṃ || MS<sup>pc</sup>; hūṃ paṃ MS<sup>ac</sup> 50 hoḥ || em.; ho MS 50 āveśaṃ || conj.; āviśaṃ MS 50 vajramuṣṭiḥ || = MS (vajramuṣṭir), or, vajramuṣṭi?

muṣṭisamayamudrāṃ baddhvā, OM VAJRAMUṢṬI VAM iti trir vadet |  
 vajrabandhasya kaniṣṭhikānāmikayor antare 'ṅguṣṭhau praveśya dhārayet |  
 iyaṃ vajrāveśasamayamudrā | asyā eva tarjanīdvayaṃ samākuñcya svāṅgu-  
 ṣṭhasamsaktam kṛtvā tena tad āṅguṣṭhaprṣṭhadvayaṃ pīḍayet | iyaṃ vajra-  
 muṣṭisamayamudrā |

## 7. Yoga

tataḥ svahṛdgatakrodhavajramadhye HŪṂkāraṃ nyasya prakṛtiprabhāsva-  
 raṃ sarvadarmanairātmyaṃ bhāvayet | tatas tenaiva HŪṂkāreṇa  
 ṣoḍaśasvarasahitena pratibimbasaṃ svacittaṃ candramaṇḍalarūpaṃ  
 cintayet | tasyopari punas tenaiva HŪṂkāreṇa kakārādibhiś ca tārakākāra-  
 pariṇatair dvitīyacandramaṇḍalaṃ tathāgatādiparamāṇughaṭitaṃ niṣpādyā  
 punar asyopari saHŪṂkārakrodhavajraṃ vajramadhye HŪṂkāraṃ manasābhi-  
 likhya

yathā sattvas tathā mudrā yathā mudrās tathā hy aham |

iti vajrāhaṃkārabhāvanayā vajrāt sarvavajrakulaṃ nirmāya tena sar-  
 vasattvadhātuṃ vajrakulasvabhāvaṃ nirvartya tān tasmin vajre manasā

51 OM VAJRAMUṢṬI VAM || = SDP 148,7; KSP Ed<sup>1</sup> §58, 94.

52–53 vajrabandhasya ... vajrāveśasamayamudrā || Cf. STTS §169 16); TĀK D li, 158a3–4.

53–55 asyā eva ... vajramuṣṭisamayamudrā || Cf. STTS §169 13); TĀK D li, 157b3–4.

63 yathā ... aham || STTS §2698.

<sup>e</sup> Cf. SVU §28–29, Tib. D 7b2–8a1; KSP Ed<sup>1</sup> §62–65.

51 trir || em.; tri MS 53 -dvayaṃ || em.; -dvaya MS 54 -saṃsaktam || em.; -saṃsakta MS 57 hūṃ- || em.; hūṃ- MS 59 hūṃ- || em.; hūṃ- MS 59 tārakākāra- || conj. (←SVU<sub>Tib.</sub> skar ma'i rnam pa); marakākāra- MS 61 asyopari || em.; asyopari pariṇatair dvitīyacandra-  
 maṇḍalaṃ MS (duplication) 61 -hūṃ- || em.; -hūṃ- MS 61–62 manasābhihikhya || MS<sup>pc</sup>; manasālikhya MS<sup>ac</sup> 63 mudrā || conj. (←STTS); om. MS 64 vajrāhaṃkāra- || conj.; vajrahūṃkāra- MS<sup>pc</sup>; vajrahūṃ- MS<sup>ac</sup> 64 vajrāt sarvavajrakulaṃ || conj.; vajrāṃ sarvavajrāt  
 kulaṃ MS 65 -dhātuṃ || em.; -dhātu MS 65 vajrakula- || conj.; (vajraṃ kula- MS 65  
 nirvartya || em.; nivartya MS

59–61 dibhiś ... asyopari || added in the bottom margin.

praveśya tad vajraṃ sattvādhiṣṭhānayogena<sup>(11)</sup> VAJRASATTVO 'HAM, VAJRASATTVO 'HAM ity udīrayan vajrasattvam ātmānaṃ niṣpādyā punar api sagarvaṃ vajraṃ ullālayann evaṃ vadet — VAJRASATTVO 'HAM iti | tatrāyaṃ<sup>172r4</sup> sattvādhiṣṭhānayogaḥ |

70 sattvo hi kila sarvātmā mamādhyātmani saṃsthitāḥ |

bhāvato vajrasattvo 'sya sarvajñaḥ praviśet puram || iti |<sup>(12)</sup>  
<sup>172r5</sup>

tena vajrasattvāhaṃkāreṇa śrīherukam ātmānaṃ vicintyaivaṃ vadet — MAHĀSAMAYASATTVO 'HAM iti | tataḥ<sup>172r6</sup> śrīherukasamayamudrā-bandhenaivaṃ vadet — SAMAYO 'HAM iti | tayaiva ca samayamudrayā

75 hṛdūrṇākāṇṭhamūrdhasv ātmānaṃ adhitiṣṭhet — SAMAYASATTVA ADHITIṢṬHASVA MĀM iti | tatas tanmantraṃ svahṛdayaṃ codīrayan yathāvat<sup>172r7</sup> tanmahāmudrāṃ badhnīyāt | tato jāpaṃ bhāvanāṃ vā kuryāt |  
iti yogamātrasādhanaopayikeyam ||<sup>(13)</sup>

70–71 sattvo ... puram || Not traced. *pāda* ab || ≈ STTS §2696: *sattvo hi (sarvapratyātmā mamāpy) ātmani saṃsthitāḥ*.

73 MAHĀSAMAYASATTVO 'HAM || STTS §301.

74 SAMAYO 'HAM || STTS §302.

75–76 SAMAYASATTVA ADHITIṢṬHASVA MĀM || STTS §303.

68 ullālayann || em.; ullālayayann MS 71 praviśet || conj.; praviśata MS 71 puram || conj.; purim MS 72 tena || conj.; taṃ MS 72 -sattvā- || em.; -satva- MS 72 vicintyaivaṃ || em.; vicintyevam MS 74 -bandhenaivaṃ || em.; -bandhaivaṃ MS 74 'ham || em.; haṃm MS 74 -mudrayā || em.; -mudrāyā MS 75 hṛdūrṇā- || em.; hṛdy ūrṇā MS 75 -mūrdhasv || em.; mūrdhāsv MS 76 -hṛdayaṃ || em.; -hṛdayaś MS 78 yogamātra- || conj.; yogamāta- MS 78 -opayikeyam || conj.; -opayikīyaṃ MS

## Notes

<sup>(1)</sup>labdhasamayādiko とある。ādi が何を指すかは本文から窺えないが、アーナンダガルバの『真実光作』(\**Tattvālokakārī*) に度々「誓戒と灌頂を得た者」(dam tshig dang dbang bskur ba thob pa) という表現が現れるため、ここでも灌頂を得ることと誓戒を得ることがセットになっていると思われる。例：

TĀK D li, 2b1–3: dam tshig dang dbang bskur ba thob pa rnams kyis thabs de la 'jug par bya'o zhes bya ba 'di'i don bstan par bya ba'i phyir | ... slob dpon gyi las rnams dang | dkyl 'khor thams cad du 'jug pa'i chog rgyas par bstan par mdzad pa yin no || dam tshig dang dbang bskur ba thob pa de rnams nyid la slob dpon gyis ji ltar mngon par 'dod pa'i dngos grub kyī ye shes bshad par bya'o zhes bstan par bya ba'i phyir | ... dngos grub kyī ye shes kyī rgyud gsungs pa yin no ||

誓戒と灌頂を得た者たちがこの方便（三昧）に入るべきであるというこの意味を示すために…（中略）…阿闍梨の諸行為と全てのマントラに入る儀軌（STTS §196–234）を解説なさったのである。誓戒と灌頂を得たその者たちに対して「彼らが」求める限りの悉地智を阿闍梨は説くべきであると示すために…（中略）…悉地智のタントラ（STTS §235–249）をお説きになったのである。

<sup>(2)</sup>誓戒（samaya）の遵守による心の浄化に係るかは不明だが、『真実光作』に律儀（saṃvara）を遵守することを「沐浴」と表現する箇所がある：

TĀK D li, 106b6–107a1 ad STTS §203 2): ci rigs par ni mchis nas kyang || zhes bya ba la | ci rigs par ni 'di yin te || dam tshig dang dbang bskur ba thob pas zla ba gcig gam | zla ba drug gam | lo gcig gi bar du rig pa'i bṛtul zhugs spyad par bya'o || de la yang dang po re zhig rang gi sdom pa la gnas pa'i

nang gi bdag nyid can gyi khru dang | phyi'i khru kyang ci nus par bya'o  
|| de la sdom pa gsum la rab tu gnas shing skyang (read skyong) ba ni khru  
gcig go || bshags pa dang gsol ba 'debs pa la sogs pa ni gnyis pa'o || phyag  
rgya dgrol ba ni gsum pa'o || chu'i khru ni bzhi pa ste | 'di dag dang gos  
gsum pa brje bar yang bya'o || de la sdom pa rnams la gnas pa ni gos dang  
po'o || ngo tsha shes pa dang khrel yod pa ni gnyis pa'o || phyi gos gtsang  
ma ni gsum pa zhes bya bar bshad do ||

“upaviśya yathānyāyam” (STTS 203 2)) 云々。「決まりに従って」とは以下  
のようである。誓戒と灌頂を得た人は、1 ヶ月、あるいは6 ヶ月、ある  
いは1 年間、明禁戒 (vidyāvratā) を行うべし。その中でも、まず始めに、  
自身の律儀 (saṃvara) に住するという内的な沐浴と、外的な沐浴 (実際の  
沐浴)も能力に応じて行うべし。そのうち、三律儀に住し遵守すること  
が一つ目の沐浴である。[罪の] 懺悔と告白などが二番目である。印を解  
くこと (mudrāmokṣa) が三番目である。水の沐浴が四番目である。これ  
ら [四沐浴] を「三衣」に入れ替えることもなすべし。その [三衣の] う  
ち、律儀に住することが一番目の衣である。慚 (hrī, 謙虚さ/内的羞恥心)  
を知ることと愧 (apatrāpa, 憤み深さ/外的羞恥心) があることが二番目で  
ある。外的な、清らかな衣が三番目であると言われている。

この「四沐浴」と「三衣」は『金剛頂タントラ』(\**Vajrasīkharā/śekharaṇtantra*)  
D 200a6–b2 (北村ほか 2012, 183) に典拠がある。

(3) vajraghaṇṭādhara nityam から niṣiktaghaṇṭādirūpaṃ までの文言は『吉  
祥最勝本初』33 章の偈頌を典拠としている。

Pā ch. 33, D488, 225b6–7:

lugs ma 'am ni brdungs ma 'am || 'dus byas pa 'am bris pa 'am ||  
dang po'i sems dpa' bzhugs gsol nas || de yi mdun du cho ga bzhin ||  
rtag tu rdo rje dril 'chang zhing || dngos grub mchog ni bsgrub par bya ||  
thams cad dgug dang mchod pa che || bdag byin rlabs sogs bsgrub rnams so

||

鑄造 (niṣikṭa, lugs ma) であれ、磚仏 (ghaṭita, brdungs ma) であれ、塑像 (saṃskṛta, 'dus byas pa) であれ、絵画 (citrita, bris pa) であれ (cf. SBSḌJŚ 7.50ab), [そこに] 本初の薩埵がお座りになるよう懇請してから、その面前で、儀軌通りに、常に金剛杵と [金剛] 鈴を持ち、最上の成就を達成しなさい。一切の鉤召、大供養、自加持などの諸成就 [によって]。

二つ目の偈頌の cd 句と ab 句の関係は不明瞭だが、下記の『吉祥最勝本初注』の記述に基づき、「一切の鉤召をはじめとする成就によって、最上の成就を達成せよ」と述べていると解釈した (別訳: 「一切の鉤召、大供養、自加持などの諸成就という、最上の成就を達成せよ」)。

PĀ-ṭīkā D i, 31a2–3: de ltar thams cad dgug pa dang | mchod pa chen po dang | bdag la byin gyis brlab pa dang | sgrub pa chen po dang | rjes su bsgrub pa rnams kyis bdag nyid dang dkyil 'khor rdzogs par byas la | nyin re de srid du bsgom par bya ste | ji srid mngon du gyur pa lta bur nyin re sgom pa'i dus su mthong bar 'gyur ro ||

以上のように、一切の鉤召と、大供養と、自加持と、大成就と、随成就 (rjes su bsgrub pa) によって、自身とマンダラを完成させて、眼前にあるかの如くに毎日の観想の時に見えるようになるまで、毎日修習しなさい。

これらの儀礼が『理趣広経』中でどのように説かれているかについては考慮する必要があるが、ひとまず *Vajrajvālodayā* の文章自体は、観想を始めるときに鑄造や磚仏のマンダラを面前に置き、そこに尊格たちを招き入れ、供養することを述べていると思われる。行をおこなう際、実際の鑄造仏などを用いることを明言する点が興味深く、スロチョロのブロンズ像セットもこのように利用されていた可能性を思わせる。

(4) ここで金剛蓮華印は「金剛縛を結び、両の人差し指を曲げ、[指の] 背を互いにつけて、針のようにして内に入れてから、付けた両の親指を立ち上が

った針のようにし、結跏趺坐の上にまっすぐ (uttānaṃ) 置く」と規定されている。校勘欄に記した通り、同じ名称の印が『理趣広経』に説かれるが、印の形が同じかは判断が難しい。

PĀ ch. 33, D488, 235b4–5:

sor mo thams cad phan tshun sbyar || kun mchog rtse mo dang bcas pa ||  
mthe bo rdo rjes bkab pa ni || rdo rje padma zhes 'grub bo ||

全ての指を互いに結び、全ての〔指〕先を備えたものを、親指の金剛杵で覆ったものが、金剛蓮華〔印〕である。

PĀ-*ṭīkā* D i, 71b5: rdo rje bsdams pa nang du byas pa'i sor mo'i rtse mo thams cad phan tshun du yang dag par sbyar ba byas la mthe bong gnyis rtse mo yang dag par sbyar ba'i rtse mo byas te | des sor mo'i rtse mo rnams dgab par byas te | 'di rdo rje padmas te dbang bskur ba'i phyag rgya'o ||

金剛縛を内に成したものの、全ての指の先を互いに固く結び、両の親指の先端を、先端がよく結ばれたようになし、それによって、指の先端たちを覆うという、これが金剛蓮華〔印〕であり、灌頂の印である。

(5) いわゆる小金剛輪印を述べる偈頌である (高橋 1988a, 144)。校勘欄に記したように『真実摂経』釈タントラと言われる『降三世大儀軌王』の続タントラに典拠がある。*Vajrajvālodayā* のサンスクリット自体には「二手金剛拳を結び、二つ〔の指〕先の端 (dvyagryāntya) を金剛縛にしたものが、金剛輪と言われる、あらゆるマンダラを成就する〔印〕である」とあり、どの指を金剛縛にするかは説かれない。

この「二つ〔の指〕」が何を指すかについて、文献間に齟齬がある。すなわち、『降三世大儀軌王』の蔵訳では「小指と人差し指」(mthe'u chung mdzub mo) とある一方、*Sarvavajrodāyā* §36(96) は「人差し指と親指」(tarjanyaṅguṣṭha) とあり、一致しない。dvyagryāntya の読みは conjecture で、写本の読み bodhyagrya は明らかな誤記。『悪趣清淨タントラ』『所作集成注』共に dvyagryāntyā の読みを採用しており、その場合 antyā を「小指」と解釈



することも可能だが、そうすると「二つ [の指] 先と小指」となり、三指を結ぶことになるため、採用しなかった。

なお、この印は『所作集成注』で「金剛因の羯磨印」と呼ばれている（校勘欄参照）。『真実光作』で金剛因菩薩（纔発心転法輪菩薩・金剛輪菩薩）の羯磨印の注釈を見ると、単に「二つの金剛拳」とだけ言われている。

STTS §288:

alātacakrabhramitā vajradvayamukhotthitā ||

旋火輪 [の如く] 旋回された、二つの金剛 [拳] を口に持ち上げた [印]  
TĀK D li,163a6–7: *mgal me'i 'khor lo bskor ba dang || zhes bya ba ni rdo*  
*rje khu tshur gnyis mgal me'i 'khor lo lta bur g-yas phyogs nas lus kyi phyi*  
*rol du bskor ba ni rdo rje rgyu'i'o ||*

「旋火輪 [の如く] 旋回された」とは、二手金剛拳で、旋火輪の如く右回りに、身体の外で回すのが、金剛印の [羯磨印] である。

<sup>(6)</sup>*Sarvavajrodayā* にも同じ偈頌が引用される。仮訳をつけるならば以下の通り。

悲により心が満たされ、知に過失がなく、全身で愚痴を打ち砕いた方、一切部族の蓮華の中央におられる善逝に、私は帰依します。

優れた知を持つものたちにとっては歓喜園 [のよう] であり、[知の] 劣る者を恐れさせるので勝者の園 (*jetṭvana* = *jetavana*(?), 祇園) [のよう] である、輪廻的生存と生存からの離脱 (*bhava-vibhava*, or 生存の威力) を観想する (*vibhāvanā*) のにふさわしい法に、私は帰依します。

貪りなどの蛇の毒を取り除き、広大な慈悲の心を持ち、智が明瞭で (智が花開き)、輪廻的生存を離れた人々に賞賛される、欲望を制御した人々 (出家者の自在者たち, *yatīsa*) の集まりに、私は帰依します。

偈頌の読み、特に *bhavavibhavavibhāvanā*- (MS: *bhavati bhavati bhāvanā*) の修正について Harunaga ISAACSON 先生にご教示いただいた。

(7) *ādyavajra* (Tib. *dang po'i rdo rje*) という語は、アーナンダガルバの著作内の用例を見るに少なくとも、1. 金剛薩埵の持つ金剛杵、2. 本初金剛という名称の印、という二つの意味がある。例えば以下の用例がある。

*PĀ-ṭīkā* D *hi*, 289b4: *gang zhiḡ yin zhe na | dang po'i rdo rje zhes bya ba smos te | bcom ldan 'das rdo rje sems dpa'i phyag na gnas pa rdo rje gang yin pa de ni dang po'i rdo rje'o ||*

何を、と問うならば、「本初金剛」と言う。世尊金剛薩埵の御手にある金剛杵が「本初金剛である」。

*PĀ-vṛtti*, D2511, 26a3: *rdo rje'i phyag rgya bcings la zhes bya ba ni dang po'i rdo rje ni rdo rje'i phyag rgya ste | de'i mtshan nyid ni 'di yin no || lṅga po bsdus pa bcings nas ni || gung bsgreng srin lag nang du gzhug | mthe bong mthe chung bsnyams rdo rje || de ni dang po'i rdo rje mchog | ces bya ba'o ||*

「本初金剛を結んで」云々。「本初金剛」とは金剛印のことであり、その特徴は以下の通り。「五〔指〕を集めて結んでから、中指を立て、薬指を内に入れ、親指と小指を合わせて金剛にする。これが最上の本初金剛〔印〕である。」と。

ここでは *baddhvā* とあるので、2. の本初金剛印を指すと思われる。印の名前ならば女性名詞の形 (*ādyavajrāṃ*) が適当であるだろうが、§12 にも同じ語が男性/中性対格で表れるため、ひとまずこの形を採用した (fol. 174r7, *punar ādyavajraṃ baddhvā*)。

*ādāyā*-は *conjecture* で、写本には *ādābodya*(?) とある。ただし *bo*, *vo*, *dho* は文字の形が似ており、この箇所については判別し難い。この文脈で三帰依処 (*triśaraṇa*) とある場合、例えば「三帰依処に帰依する」(*triśaraṇaṃ + √gam*)、「三帰依処の詩節を唱える」(*triśaraṇagāthāṃ + √path*) などの動詞があるのが望ましいが、ここで「受け取る」(*ā-√dā*) を仮に採用した一応の理由として、*Sarvavajrodayā* の以下の用例がある。

SVU §41(101): buddhaṃ dharmaṃ ca saṃghaṃ ca dehi me śaraṇaṃ  
trayaṃ | praveśayasva māṃ nātha mahāmokṣapuraṃ varam || 2 ||

仏・法・僧の三帰依処を汝は与えよ。主よ、私を偉大なる解脱という優れた城に入らしめよ。

ここに帰依処を「与えよ」(dehi) とあるので「受け取る」も可能かと考えた。ただし、これは灌頂儀礼の前に弟子が阿闍梨に懇願する文言であり、*Vajrajālodayā* のこの文脈とは異なる。

(8) この長いマントラは『理趣広経注』にも引用される。PĀ-ṭīkā D hi, 234b6–7: de nas slob dpon gyis slob ma byang chub tu sems bskyed du gzhug ste | om sarba ta thā ga ta pa ra ma ma hā bo dhi tsi tta u tpā da ya mi a be sha sarba sa twa dhā tu pa ri tra na su kho tta ma si ddhi ni mi ttaṃ a ta ga dam bha ba sam si ddhi ma hā shya rya dyi battya yā a bad sarba da ma ma hā si ddhi ma hā hi shwa dya dhi siddhi yā ya tsa zhes bya ba'i sngags kyis bya ba'o ||

(9) 「影像などの準備/適用」(pratibimbaprayoga) とある。これに関して、アーナンダガルバの \**Trailokyavijayodayā*, *Vajrasattvodayā* のパラレル部分にもう少し詳しい記述がある。

*Vajrasattvodayā* D2517, 55b1–3 (和訳：高橋 1996, 240, §52)

de nas gzugs brnyan la sogs pa'i sbyor bas phyag rgya bcing ba ni | ji srid 'tsho'i bar du 'da' bar mi mdzad do zhes nges pa bskyed nas las ston par byed pa'i sngags kyi (read kyis) las gang yin pa ste nges pa nyid du sgrub par byed do || phyag rgya dang sngags thams cad brjod par 'dod pa'i sems dang ldan pas mngon sum dang 'dra bar rang gi phyag rgya dang | lha'i nga rgyal 'chang bas phyag rgya thams cad bcing ba dang | cho ga thams cad nan tan du bya'o ||

次に、影像 (pratibimba) などのやり方で (ノ影像とのヨーガによって) 印を結ぶことについて、「[尊格たちが] 命ある限り違反なさない」という取り決め (nges pa, niyama?) を生じさせ、[各尊格の] 事業を示したマン

トラによって、事業を、取り決めに基づいて (確実に) [尊格たちに] 成就せしめる。全ての印とマントラの読誦を望む心を持つ者は、尊格としての自意識 (*ahamkāra*) を持つことにより、一切の印を結び、あらゆる儀軌を努めて行うべし。

*\*Trailokyavijayodayā* D 71a6–b1: de nas de bzhin gshegs pa dang || lha mo  
rnams kyi sku bdag nyid la gzugs brnyan du snang bas rgyal po'i bka' ltar  
'da' bar dka' zhing gzhig mi nus pas phyag rgya bcing ba dang | sngags  
brjod pa thams cad la rgyal ba thams cad kyis kyang rdo rje ltar 'da' bar mi  
mdzad pa'i lha'i nga rgyal mngon dul (read du P) bskyed cing phyag rgya  
bcing bar bgyi'o ||

次に、如来や女尊たちのお身体が、[行者] 自身に、影像として現れるので、王の命令の如く違反し難く破壊し得ないから、印を結びマントラを唱えるときはいつでも、[自身が] 金剛のように、全ての勝者たちですら違反しないような尊格であるという自意識を現前させて、印を結びなさい。

両者の記述を総合すると、先に行ったマンダラへの供養や礼拝によって、マンダラの尊格たちが影像として現れるので、行者は自身を、彼らによっても逸脱しえない尊格として観想してから、印を結びマントラを唱えよ、と述べているものと思われる。

<sup>(10)</sup>写本には *vajramuṣṭir* とある。この箇所には二点問題がある。すなわち、1. マントラの形は *vajramuṣṭi* (m. sg. voc., cf. BHS 10.33) であるのか *vajramuṣṭih* (m. sg. nom.) であるのか、2. そもそもこれはマントラであるのか、という問題である。

一つ目の問題について、前者であればその直後に出る *om vajramuṣṭi vaṃ* の語形と一致し、後者であれば『真実摂経』§136 で金剛拳菩薩が一切如来より名灌頂を授かる際の呼びかけ「金剛拳，金剛拳」(*vajramuṣṭir vajramuṣṭir*) を典拠とする可能性がある。

二つ目のこれがマントラではない可能性を支持する要素としては、『悪

趣清浄タントラ』『所作集成注』の対応箇所はこのマントラが説かれな  
いと、金剛拳印を結ぶ際に二種類のマントラを唱える必要はないのでは  
ないかという疑念とがある（高橋 1988a, n. 14 参照）。もしこれがマン  
トラでないとするれば、「金剛拳と言われるところの金剛拳菩薩の三昧耶  
印」というニュアンスになるのか。現段階では結論を保留し、『真実  
撰経』§136 に出る形を採用する。

<sup>(11)</sup>sattvādhiṣṭhānayoga という語は『真実撰経』§2206, 2032, 2532, 2696  
に見られる。そのうち、以下の用例は重要である。

Cf. STTS §2531–2532:

yac cittaṃ sarvasattvānāṃ dṛḍhatvāt sattva ucyate |  
samādhānād vajrasamo niścayair yāti vajratām ||  
sattvādhiṣṭhānayogena vajrasattvaḥ punar bhavet |  
sa eva bhagavān sattvo vajrakāyas (MS; 堀内本 vajrakāmas) tathāgataḥ ||  
全ての有情の心は、堅固であるので、sattva と呼ばれる。[sattva たる心は]  
精神集中によって金剛に等しくなり、決定により金剛となる。

[上述の] sattva [たる心を] 加持するヨーガ (sattvādhiṣṭhānayoga) に  
よって、[sattva たる心は] 金剛薩埵となるだろう。他ならぬかの世尊が、  
sattva であり、金剛の如き身体（/金剛の如き欲）を持つ如来である。

この用例は、大塚 2021, 87–88 で検討されており、「あらゆる有情の心 (citta)  
である sattva が、精神の集中（ヨーガ）によって vajrasattva となるという、  
STTS の五相成身観の観法を要略したものといえるだろう」と結論する。  
Vajrajvālodayā の 7. ヨーガにおける金剛薩埵との合一が五相成身観（五現  
等覚次第）を下敷きにしていることを考えると、ここで sattvādhiṣṭhānayoga  
の語が出ることも頷ける。

<sup>(12)</sup>sattvādhiṣṭhānayoga を述べた偈頌であるとのことだが、典拠は不明であ  
る。ab 句は STTS §2696 に類似の表現が見られる。後注 (11) を念頭に置き  
つつ、仮訳を提示するならば次のようになるか。

実に *sattva* (=有情の心) は、一切を自己とし、私 (=金剛薩埵, cf. STTS §2697: *ity āha bhagavān ... vajrasattvaḥ*) のうちに存在すると伝承されている (*kila*).

本質的に (*bhāvato*, or = *bhāvanāto* 観想によって), 一切知者たる金剛薩埵は、彼 (すなわち行者) の身体 (*pura*) に入るだろう.

(13) ヨーガの次第の全体としては, *sattvādhiṣṭhānayoga* をまでの観想で, まず金剛薩埵と一体化してから, *mahāsamayasattvo 'ham* 以下の観想によって, ヘルカとの一体化を達成する, という構造になっている.

## 一次文献と略号

### a. 経典類

PĀ: *Paramādyā*. 『理趣広経』

Mahāyānakalparāja: D no. 487, *rgyud, ta* 150b1–173a4; P no. 119, *rgyud, ta* 153b7–178a6. Mantrakalpakhaṇḍa: D no. 488, *rgyud, ta* 173a4–265b7; P no. 120, *rgyud, ta* 178a6–277b8. (全体の章立ては TANAKA 2019, 102–103 の表を参照.)

SBSḌJŚ: *Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālaśamvara*. 『サマーヨーガ』

(1) CENTRAL INSTITUTE OF HIGHER TIBETAN STUDIES, ed. 2018 (= Ed<sup>Dh</sup>).

(2) SZÁNTÓ, Péter-Dániel ed., forthcoming (= Ed<sup>S</sup>).

SDP: *Sarvadurgatipariśodhana*. 『悪趣清浄タントラ』

See SKORUPSKI, ed. 1983.

STTS: *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*. 『真実摂経』

See 堀内 ed. 1983, 1974. (セクション番号は堀内本に従う.)

\**Trailokavijayamahākālpaparāja*. 『降三世大儀軌王』

D no. 482, *rgyud, ta* 10a1–58a7; P no. 115, *rgyud, ta* 1a1–52a8.

*Vajraśikharā-śekhara tantra*. 『金剛頂タントラ』

D no. 480, *rgyud, nya* 142b1–274a5; P no. 113, *rgyud, nya* 162b2–301b8.

*Vasudhārādharmaṇī*.

CENTRAL INSTITUTE OF HIGHER TIBETAN STUDIES, ed. 2007 (= Ed<sup>Dh</sup>).

### b. 注釈書・儀軌類

KSP: *Kriyāsaṃgrahapañjikā* by Kuladatta. 『所作集成注』

6-2 章 *devatāyoga*: 乾 ed. 1991, 1992, 1994.

PĀ-*ṭīkā*: *Paramādyā-ṭīkā* by Ānandagarbha. 『理趣広経注』

D no. 2512, *rgyud, si* 49b2–242a7; *hi* 1b1–352a7; *i* 1b1–192b5; P no. 3335, *rgyud 'grel, yi* 57b3–297a7, *ri* 1a1–400a8, *li* 1a1–227a2.

SVU: *Sarvavajrodayā* by Ānandagarbha. 『サルヴァヴァジュローダヤー』

Tib. D no. 2516, *rgyud, ku* 1b1–50a4; P. no. 3339, *rgyud 'grel, shi* 1a1–57b8. *ādiyoga* 説示箇所: see 高橋 1990. Skt. (fols. 1–20, 42–44, 50–51, 57–59 of the manuscript are missing.) (1) 密教聖典研究会 1986, 1987; 高橋 1988b; 森口 1989. (2) GRIFFITH, Arlo and TANEMURA, Ryugen ed., forthcoming. (セクション番号は高橋 1988b, 100ff. の訂正表に従う。)

TĀK: \**Tattvālokarī* by Ānandagarbha. 『真実光作』

D no. 2510, *rgyud, li* 1b1–352a7, *shi* 1b1–317a7; P no. 3333, *rgyud 'grel, zi* 1a1–417a7, 'i 1a1–376a8.

\**Trailokyavijayodayā* by Ānandagarbha. 『降三世マンドラ儀軌』

D no. 2519, *rgyud, ku* 67a3–110a4; Q no. 3342, *rgyud 'grel, shi* 75b8–125a8.

## 二次文献

### a. 欧文

BHSG: EDGERTON, Franklin. 1985(1953). *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. 1, *Grammar*. Kyoto: Rinsen Books (1st. pub. Yale University Press).

BHSD: EDGERTON, Franklin. 1985(1953). *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. 2, *Dictionary*. Kyoto: Rinsen Books (1st. pub. Yale University Press).

CENTRAL INSTITUTE OF HIGHER TIBETAN STUDIES. 2007. Āryavasudhārā-dhāraṇīsūtra. *Dhīḥ: Journal of Rare Buddhist Texts Research Unit* 44, 129–147.

———. 2018. Śrīsarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvaranāmatantram. *Dhīḥ: Journal of Rare Buddhist Texts Research* 58, 141–201.

IJIN, Shiori. 2018. A Summary of the First Half of Ānandagarbha's *Vajrajvādayā*. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 66(3), 1127–1131.

ISAACSON, Harunaga. 2009. A Collection of *Hevajrasādhana*s and Related



- Works in Sanskrit. In: STEINKELLNER, Ernst, ed. *Sanskrit Manuscripts in China: Proceedings of a Panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies October 13 to 17*, 89–136.
- ISAACSON, Harunaga and SFERRA, Francesco. 2019. Indian Tantric Authors. In: *Brill's Encyclopedia of Buddhism*, vol. 2, *Lives*, 228–260. London: Brill.
- SANDERSON, Alexis. 2009. The Śaiva Age: The Rise and Dominance of Śaivism during the Early Medieval Period. In: EINO, Shingo ed., *Genesis and Development of Tantrism*, 41–349. Tokyo: Sankibō Busshorin.
- SKORUPSKI, Tadeusz. 1983. *The Sarvadurgatipariśodhanatantra: Elimination of All Evil Destinies*. Delhi: Motilal Banarasidass.
- SZÁNTÓ, Péter-Dániel. 2019. Jñānapāda. In: *Brill's Encyclopedia of Buddhism*, vol. 2, *Lives*, 264–268. London: Brill.
- SZÁNTÓ, Péter-Dániel and GRIFFITHS, Arlo. 2015. Sarvabuddhasamāyoga-dākinījālaśaṃvara. In: *Brill's Encyclopedia of Buddhism*, vol. 1, *Literature and Languages*, 367–372. London: Brill.
- TANAKA, Kimiaki. 2019. *An Illustrated History of the Mandala: From Its Genesis to the Kalacakratantra*. Somerville: Wisdom Publications.
- WEINBERGER, Steven Neal. 2003. The Significance of Yoga Tantra and the Compendium of Principles (*Tattvasaṃgraha Tantra*) within Tantric Buddhism in India and Tibet. PhD. diss., University of Virginia.

## b. 和文

- 伊集院栞 2015 「『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌について」『印度学仏教学研究』64 (1), 432–435.
- 伊集院栞, 加納和雄, 倉西憲一, ピーター・ダニエル・サント 2020 「梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第2～3章」『大正大学総合仏教研究所年報』42, 1–36.

- 乾仁志 1988 「Kriyāsaṃgraha における本尊瑜伽—梵文テキスト— (I)」『密教文化』163, 97–116.
- 1991 「Kriyāsaṃgraha における本尊瑜伽—梵文テキスト (上) —」『高野山大学密教文化研究所紀要』4, 152–184.
- 1992 「Kriyāsaṃgraha における本尊瑜伽—梵文テキスト (中) —」『高野山大学密教文化研究所紀要』5, 133–160.
- 1994 「Kriyāsaṃgraha における本尊瑜伽—梵文テキスト (下) —」『高野山大学密教文化研究所紀要』7, 91–112.
- 遠藤祐純 2014 『Ānandagarbha 造『Tattvāloka』「金剛界品」金剛界大曼荼羅和訳』, 蓮華寺仏教研究所叢書, ノンブル社.
- 大塚恵俊 2021 「『理趣広経』「大樂秘密」における \*svavajrasattva について」『佛教学』62, 75–96.
- 北村太道・タントラ仏教研究会 2012 『全訳金剛頂大秘密瑜伽タントラ』, 『金剛頂経』系密教原点研究叢刊 1, 起心書房.
- 2014 『全訳降三世大儀軌王 / 同ムディタコーシャ註釈』, 『金剛頂経』系密教原点研究叢刊 3, 起心書房.
- 高橋尚夫 1988a 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現 第一瑜伽三摩地品—和訳—」『密教文化』161, 113–150.
- 1988b 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—余滴—」『豊山学報』33, 1–58.
- 1990 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—第一瑜伽三摩地品・西藏本校訂併梵文補填—」『豊山学報』35, 1–101.
- 1996 「アーナンダガルバ作『金剛薩埵成就法広次第』和訳」『豊山学報』40, 218–262.
- 1999 「アーナンダガルバ研究—序説—」『豊山教学大会紀要』27, 1–16.
- 名取玄喜 2018 「Subhūtipālita 著〈Bhūtaḍāmarabhaṭṭārakasādhana〉所説の灌頂儀礼について」『印度学仏教学研究』67(1), 342–345.
- 堀内寛仁 1974, 1983 『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究梵本校訂篇』上, 下.

密教文化研究所.

平岡龍人 2007 『『理趣広経』諸説の〔金剛薩埵の〕百八名讃（十偈）』『印度学仏教学研究』56(1), 431–434.

松長恵史 1996 『『サマーヨーガタントラ』の金剛薩埵族の曼荼羅—中部ジャワスロチヨロ出土の青銅像—』『密教図像』15, 57–70.

密教聖典研究会 1986 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳— (I)」『大正大学総合佛教研究所年報』8, 23–57.

—— 1987 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳— (II) 完」『大正大学総合佛教研究所年報』9, 13–85.

森口光俊 1989 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika Sarvavajrodaya 梵文テキスト補欠—新出写本・蔵・漢対照；賢劫千仏名を中心として—」『智山学報』38, 1–37.

〈キーワード〉 Ānandagarbha, *Vajrajvāloḍayā*, サマーヨーガ, 真実撰経